

将来は小説家に

佐藤祐紀君（大町）



開倫ユネスコ協会主催第10回童話大賞コンクールで特別賞を受賞した佐藤祐紀君（上三川小学校5年生）に話を伺いました。

このコンクールは、小学生を対象とした童話コンクールで県内から230作品の応募がありました。見事特別賞を受賞した佐藤君は、学校の宿題やスイミング・塾などの習い事の合間をぬって、3日間で完成させ応募しました。

「どんなイメージが出てくる。」と原稿用紙10枚を超える作品は、題名も『マジックファンタジー』という冒険をテーマにした作品です。

作成しているときに辛かったことは、と聞くと「遊びをこらえて童話を作り上げたこと。」とやは

今月の輝ける星

り小学生。作品が受賞したと知らされたときは、「うれしかった。」と笑顔で話してくれました。

「本を読むのは大好き。おこづかいのほとんどは、本を買ってしまいます。」また、「自分の思いを書けるのが、とても気持ちいい。」と活字離れがささやかれる中で、文字を読むこと、書くことが楽しいとのこと。

小学校入学前のことを尋ねると「小さい頃からお母さんが本を読んでくれたり、家の前が図書館だったので、よく本を読んでいました。」と本に対する思いを話してくれました。

最後に、大きくなったら何になりたいの、と聞くと「小説家になりたいです。」と、しっかりと答えてくれました。「本が好きなのに、作品を読んでもらいたいです。そのためには、もっと勉強をしなくちゃ。」と真剣なまなざしで答えました。



切り、ビニールハウスで1週間ほど乾燥させ、出荷をすることです。

『甘-70』はとても甘く、柔らかい玉ねぎ

で、「ぜひ地元産玉ねぎを、皆さんに食べていただきたい。特に甘みがあり、他の産地のもの比べてもうまいと思います。」と力強く話してくれました。

家族4人で玉ねぎを生産している鈴木さんは、6年前に会社を退職し、就農したとのこと。

玉ねぎを生産するにあたり、辛いことは「重い、汚い、暑い。収穫が梅雨に入る時期でもあり、これからは省力化を進めて行く必要がある。」と今後の課題点を挙げてくれました。生産をして一番うれしいときは、「玉ねぎが高く売れたとき。」と笑顔で答えてくれました。今後の目標は、「出荷8トン（約32,000個）を目指して生産していきたい。」と意気込みを話してくれました。

わが町の農産物



玉ねぎ 編

今月は、今が真最中の玉ねぎです。

J Aうつのみや玉ねぎ専門部会の、上三川副支部長鈴木恭一さん（東蓼沼東）にお話を伺いました。

現在、町では80人が玉ねぎの専門部会に所属しています。専門部会の人たちは、玉ねぎに関する情報を共有し、良い玉ねぎを生産、出荷するために日々努力をしています。農作物は天候に左右されますが、玉ねぎも同じで、去年は長雨で育ちが悪かったため、今年の苗はあまり良いものがないということでした。しかし、冬の寒さが長引いたので、収穫の始まる時期が遅れ、バラツキがあるものの、「ようやく足並みがそろってきた。」と安堵のようすです。

上三川産の玉ねぎは、6月末からお盆の頃までが出荷時期で、10種類を超える品種があります。

鈴木さんのお宅では『甘-70』という品種が現在最盛期です。収穫をしてから根と茎を

